

Title	元寇の新研究(池内宏著, 東洋文庫刊)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.1 (1932. 3) ,p.140- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0141">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0141</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

美を收められんことを衷心より希ふものである。(松本信廣)

## 元寇の新研究

(池内宏著  
東洋文庫刊)

蒙古襲來が、たゞに我國史上の一大事件たるのみならず、精銳をもつて鳴る蒙古軍の連戦連勝の記録に印せられし僅少の敗戦の一つとしてかつまたマルコ・ポロの旅行記の中に最初の詳細な日本紹介の記事となつて表はれし點などよりして或意味に於て世界的意義ある事件と云はねばならぬ。此重要な出來事に對し、從來「伏敵篇」の如き資料集が現はれ、かつ國史方面に若干の興味ある論文が新資料の發見に伴うて公にせられたが、未だ是等の資料全體を纏めて元寇の役を充分科學的に考察した研究の現はれないのを遺憾としてゐた。此缺陷を満した池内博士の新著は、實に學界多年の翹望に添へるものであり、博士の努力に深く感謝しなければならぬ。

本書は、二卷よりなり、第一卷は、まづ蒙古の高麗征伐について語り、初め武力に訴へしものが、世祖に至り、懐柔的態度を取り、根本的に此の國を服屬せしめんとし、そのために日本を藩屬せしめんといふ欲望を起し、高麗に嚮導の義務を負はしめた経緯を明かにしてをる。世祖の日本征討が一に高麗の完全な服屬に淵源してゐたことは田中萃一郎教授のつとに説かれてゐた所であつたが今や鮮滿史の權威者たる池内博士の多年の蘊蓄を傾倒せられた明快な研究によつて久しき間の日本征討原因に關する疑問が雲散霧消したのは吾人の欣快とする所である。

ついで博士は、日本側の貴重なる資料である蒙古襲來繪詞を主として利用して文永・弘安の兩役を新たに解釋せられてをる。一體蒙古襲來繪詞の大矢野文は、或時代に於て紙の繼目がとけちり亂れたるを、綴り合せたもので、博士は、これを考定して新順位をたてられてゐる。氏によれば文永の役には敵の高麗軍は二十日朝龜原の海岸に上陸し、赤坂に迫り、他方蒙漢軍は、博多に上陸し、また一部は今津に上陸し、博多近邊で戦つた我が大兵は、戦ひ疲れて太宰府に退き、箱崎は、賊徒に蹂躪せられたが、賊徒は、その船中に引き上げ、夜中起つた颶風によつて兵船の大半覆没して退散した。弘安の役に於ては、東路軍は五月廿一日對島の佐賀(世界村)大明神浦(大明浦)を犯し、更に壹岐を襲ひ、六月六日に志賀島に迫り、八日間志賀島、能古島の附近に於て、水陸に日本軍と戦ひ、遂に退いて肥前の鷹島に據り、その一部は長門を襲ひて引き還へした。一方江南軍は、その先發軍が六月末對島、壹岐に來り、東路軍の一部と合して六月廿九日、七月二日の兩度逆撃した日本軍と壹岐に戦ひ、平戸に引き、その主力は、平戸(平壺島)に著し、先發軍及び東路軍と合し、鷹島(竹島、日本傳の五龍山)に移り、愈々太宰府を大舉襲はんとして閏七月一日の颶風に遇ひ、大半覆没した。我軍五日より七日に互り殘敵を襲ふて之を盡し戦役の幕を閉ぢたといふのが氏の大體の推考である。

最後に博士は、征東軍慘敗後の處置、至元十九年以後の征日本計畫を述べて本篇の終りとしてをる。

第二卷は、御物大矢野本蒙古襲來繪詞の縮寫複製であり、博士

の考定した新順位に依つて排列されてをる。世界的に活躍した蒙古兵の風貌その隊形、武器、軍船等を精緻に書き傳へた本繪巻が、世界の寶物であることは云ふまでもない。評者は、パリの國民圖書館の東洋展覽會に陳列されたラシッド・ウツジンの蒙古史中蒙古人バグダット攻略の繪（一三一五年項のもの）を見たが、その幼稚なる到底我竹崎季長のそれに及ばない。此ユニツクな歴史的記念物とも云ふべき圖巻を復刻された博士及び東洋文庫の學績に對しては吾人は衷心より感謝しなければならぬ。同文庫は頃日來我國東洋史の名篇を歐文に譯して外國に紹介されてをる。ねがはくば此「元寇の新研究」も繪詞の解説と共に歐文になほして世界の學者に紹介していただきたいものである。西域邊土の地名の研究も重要ではあるが外國學者にとりては本書の如き著書の出現を本邦學界に久しく待望してをつたのである。（松本信廣）

## 史觀（第一冊）（早稻田大學文學部編）

最近各大學が相踵いで史學に關する研究雜誌を發行し、史學界は頗る活氣を呈するに到つたが、此の時期に當つて早稻田大學の史學科から「史觀」の刊行された事は眞に學界の慶事といふべきである。

先づ開卷第一に浮田和民教授の「史學管見」なる論文があり、第二には野々村戒三教授の「歴史事實に關する私見」なる論文がある。共に史學の理論を扱つたもので、前者は歴史の本質と史學者の任務とその資格などに就て述べ、後者は史學の科學的研究に

據るべきものなること及び史料の性質如何によつて史實の可信程度に相違あることを論じてゐる。

西洋史に關するものには中西敬次郎氏の「希伯來の聖數に就て」、小林正之氏の「宗教改革前獨逸の精神界に關する諸説」、小島幸治氏の「現代ロシアの國史研究とその問題」がある。中西氏は舊約聖書中に散見する三・四・七等の數が聖數として特殊な意味を有するに至つた理由を心理學及至歴史の立場から考察し、小林氏はパウロ・ヴンダリーヒの論文によつて獨逸諸大家の宗教改革前の時代に關する批判を紹介してゐるが、ヴンダリーヒの批判の價値は兎も角、宗教改革研究者に便利なビブリオグラフィを提供したものとて貴重である。小島氏はレニン大學教授カレエフ氏の論文を *La Revue Historique* から翻譯して現代ロシアの史學界の狀況を紹介してゐる。

東洋史に關するものは清水泰次氏の「明代の宦官」と出石誠彦氏の「支那古代史研究の趨勢と説話考察の意義」とである。前者は明代の宦官の勢力が時代の進展と共に増長せる次第を論じ、後者は支那古代史研究の各方面を紹介し、氏の企圖せらるゝ説話考察による古代史研究の意義を強調してゐる。

國史に關するものには「日蘭交通の起源」と題する京口元吉氏の論文と「我國石器時代人の食料」と題する池上啓介氏の論文とがある。京口氏は蘭船リーフデ號が全く偶然の事實に依つて來航せることを明らかにし、同船に英人の乗組みたる理由を考察してゐるが、考證であるから無用な形容詞を省略し、全體としても少し簡潔に論じ去られたら如何であらうか。池上氏は石器時代の遺